第 52 号

2018 年 3 月 16 日

会報

青山学院大学
日本文学会

（題字）湯池　孝先生

巻頭随筆

一瞬の夏

日本文学科教授　篠原　進

寝ても〳〵目さむる夏の青み哉

やっとの思いで書き上げた、一二〇枚の原稿。ほっとした気分と、至福の世界にもう少し涵っていたいという複雑な思いが交錯する朝の副学長室。いわゆる、村上春樹の「地下二階」の世界。潜った海が深ければ深いほど、浮上が困難になる。

文学研究という名のサルベージ作業。海底に眠るのは江戸時代の俳諧師、北条団水。芭蕉に「凡俗」と貶され、西鶴研究の傍流としてこれまで片寄せられてきた彼であるが、その評価が今、一変しようとしている。二五歳の時に手掛けた、人形愛（ラブドール）の倒錯世界（『色道大鼓』巻一の二・一六八七年）。筑紫に残した新婚妻を象（かたど）った人形に耽溺し、江戸の単身生活を紛らわした男の話だ。

二〇四九年の近未来では、人間とレプリカントが普通に同居しているというが（映画「ブレードランナー二〇四九」）、団水は両者を等価と考えていたのか。彼が独身を通したのは、虚無的世界への親炙と関係するのだろうか。

ともあれ、三三〇年も前にあぶない世界を垣間見てしまった団水。こよなく酒を愛した彼は、冒頭のような句を詠んだ。春は青、夏は朱といった伝統的な約束事や、しち面倒くさい作法などどうでも良いのだ。痛飲した翌朝、彼の眼に飛び込んできた夏の色は、まぎれもなく「青」だったのである。

覚醒を促す、透明な青。降り注ぐ夏の光の下で、団水は何を凝視したのか。

原稿に「最終講義」という文字を記し、窓に向かう。間島記念館脇の欅も気付けば秋色に染まり、黄葉した銀杏の下に歓声が響く。明日は青山祭。いつもながらの活気に満ちた風景。だが、そこにいるのは去年の学生ではない。時の流れは不可逆的で、一回的なのだ。変わるものと、変わらないものとのアナロジー。無常、不易流行、そして「動的平衡」（福岡伸一）。

青山学院で過ごした四二年。一瞬の青い夏。だが、変化は常にある。「文庫X」の仕掛けに続き、書簡体小説に代わるSNS文学（『ルビンの壺が壊れた』新潮社）がベストセラーとなった出版界は、遂に五四〇〇円小説（松浦寿輝『名誉と恍惚』同）で、これまでタブー視された読者の選別（ドレスコード）に踏み込みはじめたのだ。

大学教師という蕎麦屋が饂飩を出すのも普通となり、パクチーが苦手でもエスニック料理を作ることを余儀なくされる教師受難の時代。

小器用な生き方に背を向け、孤高の研究者を気取るのも悪くはない。ただ、専門という固い殻に閉じ籠っていれば良いわけでもない。深い穴を掘るためには、広い面積が不可欠でもあるからだ。そう自分に言い聞かせ、時には専門外の料理を作ってみるが、そうしたものが美味（おい）しかったためしはない（拙稿「『男色大鑑』のショーケース」『男色を描く』勉誠出版・二〇一七年）。

京都大火（一七〇八年三月八日）を機に、急速に変容する京都の都市空間。四九歳で亡くなるまでの三年間、それと対峙した団水の口癖は、「孔子も時に合わず」だった。

すぐに役立つものは、賞味期限も短い。そんな中、即効性はなくとも体質を根底から変える文学（ナラトロジー）の力に医学界が注目しつつある。「物語療法」（大平健『診療室にきた赤ずきん』新潮社・一九九四年）を体系化した新しい学問だ。

前回の「会報」（51号）で述べたごとく、二一世紀は花水木より「臙脂の木蓮」（日文三〇周年記念樹）の時代なのである。

研究余滴

くずし字のこと

日本文学科教授　片山　宏行

今は「文学研究法」で教わる変体仮名を、学部時代わたしはけっこう一生懸命勉強したと思う。が、専門の近代文学に埋没しているうちに「くずし字」との接点は切れて、「そば屋」の暖簾が読めるレベルに戻ってしまった。

ところが、近代文学の資料を探しているうちに、倉敷市が所蔵している薄田泣菫（倉敷出身）宛の書簡や生原稿と遭遇することになった。これがまさに一級資料で、興奮冷めやらぬままプロジェクトチームを立ち上げ、そそくさと科研費をもらって解読・整理することになった。

くずし字に慣れた古典研究者ならば、この宝の山をたちどころに読み解いてゆくところなのだろうが、メンバーは全員戦後生まれの近代文学専攻の活字世代、たちまち「くずし字の壁」で悩むことになった。くずし字事典などひっくり返してもほとんど太刀打ちできない。私信というのは個性的で、細かな筆書き（ペン書きはまだ何とかなる）には、お手上げだった。まさしく「蘭学事始め」の杉田玄白、「フルヘッヘンド」の世界である。なにより弱ったのは、大部分が「宛書簡」であり、前後の文脈がまるで分らないことだった。往復書簡ならば、話のなりゆきから外濠を埋めるようにして文脈を推測し、不明の字句を確定することもできる。がそんな僥倖はなかった。しかも泣菫は『大阪毎日新聞』の文藝部長であったから、その交際範囲はまことに広い。徳富蘇峰や芥川龍之介といった有名どころなら、消印からでも彼らの伝記的情報にあたって文意を類推することもできる。が、もはや文藝事典にも名前の残っていないような作家や、出版業者、誰とも知れぬ交友のいちいちまでとなると、迷宮入り目前のヘボ刑事のような虚脱感におちいった。

年に数回、メンバー各自「宿題」をもって、倉敷市役所の一室に閉じこもり数日間うなり続ける。助かったのは地元の泣菫顕彰会に古文書読みの名人がいて、いくつもの難題を解決してくださることであった。一方、弱ったのは、資料は倉敷市の文化財であるから、研究成果は一年ごとの市の予算で刊本として着々と形にしなければならないことであった。〆切も自分の勝手な論文であれば、火事場の馬鹿力に変じることもあるが、とにかく読解という絶対関門を突破しなければ、自分の土俵に持ち込むこともできないのだ（活字テクストを比較するだけの近代文学の本文校訂など「ウォーリーを探せ」レベルだと思った）。

そんなわけで最初にのろしを上げたはずのわたしは気力体力ともに消耗の一途。心筋梗塞でステント手術をするはめにもなって、もはや恥も外聞も捨てて白旗。後輩の藤川雅恵さんに助けを求めた。近世文学専門の藤川さんは、さすがこれをやすやすと（としか私には思えなかった）片付けてくれた。学恩である。近世と近代のコラボめでたし（?）。

そうこうしてこの奮闘は『倉敷市蔵　薄田泣菫宛書簡集』（八木書店）三巻（二〇一四～二〇一六）としてなんとか世にでた。資料との遭遇から足かけ九年かかった計算になる。

さて、わたしは何が言いたいのか。要するに「くずし字リテラシー」が日本文学研究の基本であるという当たり前の事柄だ。日文生たるもの、英語はわからなくても、くずし字は読めなければならない。でなければ、「日本人の心」のアーカイブがゴッソリと失われたまま、わたしたちは自分を日本人だと思い込んでしまいかねない。

「日本人の心」といっても時代だ

第52号　目　次

巻頭随筆　2
研究余滴　4
日本文学会春季大会　3
日本文学会秋季大会　2
二〇一六年・二〇一七年の日本文学科の活動　6
院生部会報告　7
研究レポート　9
今年度の学生の活躍　10
海外で活躍する日本文学科生　12
日本文学科留学生の動向　13
卒業生・四年生からのメッセージ　15
夏期集中講義　16
研究室探訪　18
日本文学科関係書籍　19
日本文学科同窓会から　20
篠原先生を送る　21
二〇一七年度講義題目　22
研究室だより・編集後記　25
28

民族だグローバルだ、といった大そうな話ではない。「干し柿ありがたく、床上げの太郎にさっそく食はせ候ところ……」といったような、礼状に記されたまるで宝石のような一語一語のきらめきを言いたいのである。これは活字やら、「青空文庫」ではだめだ。「意味」しか伝わらない。

意味を越えた「思い」が肉筆書簡には秘められている。今回のわたしにとっての「出来事」は、有名無名、多種多様な大量の肉筆――筆やペン、墨やインクの濃淡、一点一画の字体の個性、便箋や絵葉書にこめられた繊細な筆者の思い、といった肉筆書簡のアウラ――活字テクストでは決して発信されない表象の豊饒さをつくづく感じさせてもらったことだ。そして思ったのである。もし自分も書く側になることができれば、この肉筆世界に遊ぶ喜悦はいかほどのものだろうかと。

あと数年で停年である。その後の命がわたしにあたえられているのならば、まずは習字の勉強を始めて、いつかくずし字世界を自力で心底味わいたいと思うのである。古希にして「文学研究法」に立ち帰る、などというのもオツな生き方ではあるまいか。

日本文学会春季大会

講演：蒲谷宏先生（早稲田大学大学院日本語教育研究科教授）

「日本語の『行動展開表現』における『丁寧さの原理』について」

博士前期課程一年　**福田　洋子**

二〇一七年五月二十七日、青山学院大学日本文学会春季大会が総研ビル十二階大会議室にて開催された。

講演会では、早稲田大学大学院日本語教育研究科の蒲谷宏教授が「日本語の『行動展開表現』における『丁寧さの原理』について」と題して講演された。講演の冒頭で、「シテモラッテモイイデスカ？」という表現は、「なぜ丁寧だと言えるのか？」と、当日の検討課題を提起された。その後、この課題の検討対象表現を提示され、各表現の構造を丁寧にご説明された。

A、シテクレマスカ？

B、シテモラエマスカ？

C、シテモラッテモイイデスカ？

結論は、Cの「シテモラッテモイイデスカ？」は、AとBが「依頼表現」なのに対し「許可求め表現」であること、その構造は【行動＝自分、決定権＝相手、利益・恩恵＝自分】となり「行動展開表現」の構造に一致し、最も丁寧な表現になるというご説明をされた。

次に、

A、その本を取ってくれますか。

B、その本を取ってもらえますか。

AとBはどちらが丁寧か？

B、その本を取ってもらえますか。

C、その本を取ってもらってもいいですか。

BとCとどちらが丁寧か？

ここで、蒲谷教授は「なぜ、依頼なのに許可求めの表現にするのか？」と、さらに検討課題を提起された。

課題説明の前に、「表現の意図にかかわる重要な事柄」「あたかも表現」の説明がなされる。

「あたかも表現」とは、「意図」はXであるが、あたかもYを「意図」しているかのように表現すること。

許可求め型表現

C、その本を取ってもらってもいいですか。

の構造は【行動＝自分、決定権＝相手、利益・恩恵＝自分】で、意図＝依頼　形式＝許可求め。

仮説として、次のように説明された。「シテクレマスカ？」の依頼表現形式が丁寧さの原理において不足していたのは、【行動＝自分】ということを明示することであった。このことを補う表現として、「シテモラエマスカ？」が生まれた。それをより明確にした表現が「許可求め型」（意図＝依頼）としての「シテモラッテモイイデスカ？」である。「許可求め表現」が丁寧さの原理において、最も丁寧な表現であるため、依頼においてもその形式を使用するようになったと考えられる――。

日本語の「行動展開表現」における「丁寧さの原理」に即して考えると「シテモラッテモイイデスカ？」は、依頼の意図を持ちながら、最も丁寧な構造を持つ許可求めの形式で表現している点において、丁寧な表現だということができる。

さらに、蒲谷教授は次の検討課題を提示された。

なぜ、「シテモイイデスカ？」という許可求め表現で十分丁寧なのに、わざわざ「サセテモラッテモイイデスカ？」という表現にするのか。

講演も後半になったが、蒲谷教授は仮説としながらも丁寧にご説明してくださった。

許可求めに足りなかったものは「利益・恩恵」を明示的に表す部分であった。それを補うものが「サセテモラウ」であり、その結果、「サセテモラッテモイイデスカ」が生まれたと考えられるとのご説明であった。

一時間程の講演であったが、脳内シナプスが活性化し、従来の敬語表現を超越する心遣いと思いやりを伝える「丁寧さ」の敬語表現に驚嘆し、また、蒲谷教授の理路整然としたご説明に引き込まれた講演会であった。

世界でも類を見ないコンビニ王国の日本であるが、そこで、接客に使われている言葉遣いが、最上級の敬語表現だったことに驚きを禁じ得ない。

また、仮説としてご説明された蒲谷教授の敬語表現が数年後には日本中で使用されることになるかもしれないなどと考えるに及び、大変有意義なご講演であった。

春季大会報告
―発表第一歩

博士前期課程一年　**松本　瑞紀**

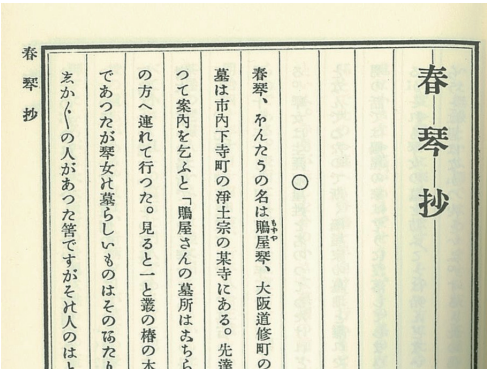
二〇一七年五月二十七日の青山学院大学日本文学会春季大会で、「装丁が語る『春琴抄』―谷崎潤一郎の自装本とその意識」という題で発表をさせていただきました。

私が研究対象としている「装丁」とは、いまでは単に本の見た目、外側のデザイン性を表すことが多い言葉ですが、そもそも「内容と本全体のデザインが一体化したもの」を指す言葉だと私は考えています。それを観察することによって作品理解につなげることができるのではないか、特に著者自装（著者自身が自分で装丁を手がけたもの）ではより直接的に作品世界の表現が行われるのではないか、という前提に立ち、今回は谷崎潤一郎自装の『春琴抄』（創元社、昭和八年）に注目しての発表となりました。

『春琴抄』の装丁はかなり特殊なもので、表紙に黒漆を使用しています（特装版として赤漆のものも存在します）。これは前述のとおり著者自装、つまり谷崎自身が創案したもので、非常に手間のかかるつくりでした。日本近代文学館が名著復刻版を手がけた際にも「ボール紙の芯に何度も何度も漆を塗っては乾かしを繰り返さなければならなかった、7回8回と塗り重ねてようやくツヤが出るので時間もかかる」という苦労が語られています。そして背の題字は金箔押し、表紙の金蒔絵の文字は一冊一冊手書き。今ではなかなかチャレンジできないような手間とコストを想像できるかと思います。また外見に加えて本文組版も特異で、変体仮名活字を使用し、巻末広告を含む全文に罫線入り。読みやすいとは言いがたいですが、そこにこそ谷崎の意図があるのではないかと考えました。

この本は現代においては「ゲテ本」などとマイナス評価されることがあります。しかし谷崎はただ奇妙な本を作ろうとしたわけではなく、作品内容とリンクさせてこの装丁に行き着いたのではないでしょうか。漆という日本古来の素材をあえて本に使用した点や、洋本仕立てでありつつ和本のような版を組んだ点。これらは、語られる世界が幕末～明治初期の話であることを踏まえていると考えられます。また、『春琴抄』は「鵙屋春琴伝」という実在しない偽書をもとにした物語という体をとった作品ですが、この装丁の本からはその偽書がじつに本物らしく思えてくるのです。読者は読み進めるうちに無意識的に物語世界へ引き込まれてゆく、そのために谷崎が苦心をはらって作り出したのが『春琴抄』の装丁といえます。

しかしこのような話は、こうして文章のみで記述するだけではやはりわかりにくいので、当日の発


春琴抄

○

春琴、みんたうの名は鵙屋琴、大阪道修町の
墓は市内下寺町の淨土宗の某寺にある。先達
つて案内を乞ふと「鵙屋さんの墓所はあちら
の方へ連れて行つた。見ると一と叢の椿の木
であつたが琴女は墓らしいものはそのほかに
まかくの人があつた筈ですがそれ人のはし

表ではスライドを使用し、写真をたくさん載せて見ていただきました。自分が初めて『春琴抄』の装丁を見た時に「なんだこの本は、変な本だな」「なんでこんなもの作ったんだ」などと思ったのですが、写真を映した時、同じようなことを感じているようなお顔がちらほら見えて安心してしまいました。変な本なのです。そういうふうに感じたことを、そこで終わらせずに探究しだしたことが私の研究の始まりになりました。

発表は正直とても下手でしたし、内容に関しても、まだまだ表面的な部分をさらっただけにとどまり、またはじめに述べた「装丁を観察することで改めて作品理解へつなげる」という視点にも十分には踏み込めませんでした。この点については発表後の質問でもご指摘いただきました。ですがそうやって、自分の現在地を確認すること、ひとの指摘で問題点を認識しなおすことが、次の段階に繋げるためには必要なことだとも思います。私自身は物事を自分のなかで完結させてしまいがちで、「なぜ？」に対する答えを見つけた時点で「そうなのか」といって、それ以上の考えを巡らせなくなってしまうことがしょっちゅうです。しかし今回の発表にあたって様々にそして直接に指摘や質問をいただき、「そうなのか」の先に踏みこむことになりました。「研究の始まりになりました」などと書きつつ小さな一歩ですが、人前に立ってものを伝え、その反応を受け取ったこの機会は、よい経験の一歩になりました。

研究発表／石川淳「おとしばなし」論（帆苅基生氏）、装丁が語る『春琴抄』―谷崎潤一郎の自筆本とその意識―（松本瑞紀氏）

日本文学会秋季大会

講演：藤井彩子氏（NHKアナウンサー）

「日本語で話して伝える」

日本文学会運営委員会委員長
二D　伊藤　遥

二〇一七年十一月十八日、第三回日本文学会秋季大会が17号館の一七三一一教室にて開催された。今回は講師にNHKアナウンサーとして活躍されている日本文学科卒業生（九三年卒・永藤武ゼミ）の藤井彩子氏をお迎えし、「日本語で話して伝える」と題して講演していただいた。

自己紹介の後、藤井氏は「声」にまつわることから話を始められた。最初に出席者全員に対して「自分の声が好きかどうか」と質問し、出席者が自分の声をどう思っているかについて確認をされた。今回の出席者の中では「自分の声は特に好きではないが、嫌いでもない」という気持ちを抱いている人が多数を占めたのであるが、藤井氏は「実は日本人の八十パーセントが自分の声を嫌っている」というデータを示され、会場内を驚かせた。さらに、藤井氏は「自分の声が嫌いな人は自己肯定感も低い」、「声によって私たちは他人に対するイメージの大部分を形成している」という事実も示され、その上で自己肯定感を高めるため、そして他人に良い印象を与えるためには「自分の声に向き合うこと」が大切であるとの考えを示された。

藤井氏によれば、日本人は自分の声に関心を持つ人が非常に少なく、自分の容姿や言葉の選び方に気を配る人は多いが、声そのものを磨こうとする人は少ない。そして、共に吃音を克服し、人前で話すことを逆に武器にしていった田中角栄元総理と落語家の三遊亭圓歌氏を例に挙げ、声と向き合うことで自分の魅力を引き出すことができるという考えを再度強調された。

それでは、自分の声と向き合うためにはどうすれば良いのか。藤井氏はその最初のステップとして自分の声を録音することを勧められた。それも単に友達と会話をしているときの声を録音するのではなく、誰かに何かを伝えているときの声を録音すると良いのだと言う。そして、良いと思った部分を繰り返し聞き、その声を再現するよう努めることで徐々に自分の声に磨きをかけていくことが出来るのである。

日本人は作り声を自分の声として認識していることが多い。これは自己肯定感が低く、自分の素顔を見せまいとするためである可能性が高い。中でも女性は声の高い

人が増えており、これには女性の社会進出が先進国の中では圧倒的に進んでいないことが大きくかかわっているのではないか、とも述べられた。

続いて、藤井氏は「ことば」について触れられた。まず、言葉は変化していくものであるとして、「やばい」「全然」「絶賛」等を例に、世代によって使い方の異なる言葉に言及された。そして、このように全く異なる意味を持つ言葉が増えていく中で、アナウンサーとしてニュースを伝えるときにどのような言葉選びをするのか、実際に資料を用いて説明してくださった。人につける敬称や動物が死亡した時に使う表現については誤解の少ない表現を選ぶとしながらも、場合によって相応しい表現が変わるのが現実であり、状況を想像する力が必要であると言われた。

藤井氏は、出席者全員で実践することとなった正しい呼吸法のレクチャーと、本学日本文学科生へのメッセージで本講演を締めくくられた。藤井氏からのメッセージは「現在のグローバル化が進むこの世の中だからこそ、本学で日本文学を学ぶことは自身のアイデンティティを確立する上で非常に意味がある」というものであった。

藤井氏は普段、ラジオというリスナーとの間で双方向のやり取りが行われるメディアで活躍されていることもあり、今回の講演でも聴衆の生の声を聴きながらお話を進められた。そのため、非常に活気に満ちた講演会であったことが強く心に残った。アナウンサーとして活躍されている藤井氏にしか伝えられないことを数多く伺うことができ、短くも大変有意義な時間であったことをここに報告したい。

二〇一六・二〇一七年の日本文学科の活動

国際シンポジウム「詩歌が散文と出会うとき」

日本文学科教授　**高田　祐彦**

二〇一六年七月十日に、恵比寿の日仏会館ホールで開催された。日本文学科とフランス国立東洋言語文化大学日本研究センター（INALCO）、日仏会館フランス事務所の共催である。シンポジウムのねらいは、日本とフランスの古代中世において、詩歌と散文とがいかなる関係で文学世界を形成しているかを探ることによって、その普遍性や相違点を浮かび上がらせるというところにあった。

午前の部は、本学科の土方洋一教授の「物語を作る和歌」、およびパリ第8大学のクリストファー・リュケン氏の「雄鳥の歌から驢馬の散文へ」の二つの発表と討論が行われた。討論のディスカッサントは、江戸川大学の鈴木哲平氏が務められた。昼食をはさんで午後の部は、パリ第3大学のドミニク・ドマルチニ氏の「十三世紀中世物語における叙情詩引用の諸形態とその意味」、および東京大学の渡部泰明氏の「和歌史と『源氏物語』作中歌の相関」の二つの発表と討論が行われた。討論のディスカッサントは、早稲田大学の田渕句美子氏が務められた。その後、総合討論に移り、INALCOの寺田澄江氏と本学科の高田祐彦が共同司会を務めた。研究の先端を示す刺激的な発表によって、発表者同士で活発な討議が交わされるとともに、フロアからの多様な視点や関心に基づく質問によって、一段と討論は活発になり、終了予定時間をしばらく過ぎて、ようやく散会となった。

ほぼ一日を費やして、数多くの論点が明確になったことは、一つの成果であったが、一方、抱懐する課題の大きさのために、じゅうぶんに個々の問題点を深めることができなかったことは、多少心残りではある。ただ、シンポジウムというものは、何か結論や合意を目指すのではなく、さまざまな問題提起によって、参加者各自に刺激を提供するものだと考えれば、相当に大きな収穫を得たと思われる。参加された方々、とりわけ、会報の記事としては卒業生に厚くお礼を申し上げたいと思う。また、協力をしてくれた学生諸君、ありがとう。

日本文学科主催 トークィル・ダシー氏講演会

日本文学科教授　**小松　靖彦**

日本文学科は、二〇一六年十一月十九日（土）、十三時二十分から十五時に、青山学院大学青山キャンパス17号館一七六〇六教室にて、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）アジア言語文化学部准教授トークィル・ダシー Torquil Duthie 氏の講演会「古代日本の世界像と万葉集」を開催した。この講演会は、二〇一六年三月三十日に締結され

た日本文学科とUCLAアジア言語文化学部の学術協定に基づいている。

ダシー氏は一九六八年生まれの英国人。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）を卒業し、北海道大学大学院修士課程、コロンビア大学大学院博士課程を修了。二〇〇五年に学位論文"Poetry and Kingship in Ancient Japan"（「古代日本における詩と王権」）で博士号Ph.Dを取得された。ダシー氏の専門は日本古代文学、特に『万葉集』『古事記』『日本書紀』の歴史叙述――いかに〈歴史〉を創造したか――について研究を進めている。

講演は二〇〇四年刊行の*Man'yōshū and the Imperial Imagination in Early Japan*（『万葉集と古代日本における帝国的塑像力』）を基に、その後の知見を加えたものである。十九歳の折の柿本人麻呂の挽歌に対する「感動」を辿り直しながら、歌の「感動」が複数の人間を感情的に統一する力であることを説き、さらに、生得的に直接的で豊かなものと見られがちな万葉人の感情世界が、実は天皇を中心とする政治的世界の〈文化〉として生み出された、という新鮮な見方を提示された。

ダシー氏の穏やかな語り口と、人麻呂挽歌の美しい英訳も聴衆の心を強く魅了した。質疑応答では、『万葉集』の英訳方法を中心に、活発に議論が交わされた。講演会の記録は、ブックレット『『万葉集』における帝国的世界と「感動」』（笠間書院、二〇一七）として出版されている。

学術協定の締結

日本文学科教授　**小松　靖彦**

一九六六年に、世界的視野に立つ新しい日本文学（日本文化）研究をめざして創設された日本文学科では、近年、この理念に沿って、特色ある日本語・日本文学研究を進める海外の大学との間で、共同研究、教員交換、将来的には大学院生の交換も行うために学術協定を積極的に結んでいる。二〇〇六年度に学術協定を結んだコロンビア大学東アジア言語文化学部に加え、二〇一六・二〇一七年度には新たに以下の三つのDepartmentと協定を締結した。

(1)　**州立カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）アジア言語文化学部** Department of Asian Languages and Cultures［二〇一七年三月三十日］　アメリカ合衆国西海岸におけるアジア研究の拠点学部。日本文学については、トークィル・ダシー准教授（古代文学）とマイケル・エメリック准教授（近世文学）のもと、合衆国のみならず世界各地から大学院生が集い、斬新な研究を進めている。二〇一五年の「和本ワークショップ」の講師としてUCLAに小松が招かれ、一六年に佐伯真一教授と小松がダシー准教授の大学院の授業で講義をしたことを機に学術協定を締結。

(2)　**国立リュブリャーナ大学文学部アジア研究学科** Department of Asian Studies［二〇一七年二月二十五日］　スロベニアにおけるアジア研究の拠点学科。日本研究専攻は、アンドレイ・ベケシュ名誉教授（日本語学・言語学・日本語教育）、重盛千香子准教授（日本語学・言語学・日本語教育）・守時なぎさ准教授（日本語教育）らを中心に、現代日本の社会・文化を歴史・伝統や広い地域的文脈の中で理解することをめざす。二〇一六年度教育改善支援制度プロジェクトのワークショップ「海外における日本文学教育の現状と課題」にベケシュ教授を招いたのを機に、学術協定を締結。

(3)　**東北師範大学外国語学院日本語学科**（日語系）［二〇一七年三月十五日］　中華人民共和国吉林省長春にある国家教育部直属の重点大学の一つ。日本語学科は中国東北部の日本研究・日本語教育の拠点で、林忠鵬教授（日本語学。特に『和名類聚抄』）、太文慧准教授（日本語教育）らの指導のもと、少数民族出身者も含む多くの学生たちが日本語・日本文学・日本文化について学んでいる。東北部は近代日本との関わりが深く、その歴史についての共同研究を林教授と小松が開始したことを機に学術協定を締結。

教育改善支援プロジェクト「留学生のための日本文学・日本文化の独自テキストの製作」

日本文学科教授　小松　靖彦

日本文学科教員の廣木一人氏（副代表）・佐伯真一氏・山下喜代氏・澤田淳氏・遠藤星希氏・小松靖彦（代表）、英米文学科教員の西本あづさ氏のメンバーからなるプロジェクト「留学生のための日本文学・日本文化の独自テキストの製作」が、二〇一六年度の学内公募による「教育改善支援制度」の事業に、審査員の高い評価を得て採択された（予算額一五〇万円）。

「教育改善支援制度」はＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）ならびにＳＤ（スタッフ・ディベロップメント）推進の一環として発足したもので、本学で行われる教育の質的向上をめざす取り組みや、新たな教育プログラム開発を支援することによって、教育の改善・改革を進めることを目的とする。

このプロジェクトは、日本文学科に毎年入学してくる私費留学生のための授業「日本文化文学入門」（二〇一三年度より開講）の教科書（テキスト）を製作することを第一の目標とし、併せて本学の交換留学生にも日本文学に容易にアクセスできる教科書（テキスト）とすることもめざした。日本文学に焦点を絞って日本文化を紹介する、留学生対象の教科書はまだ出版されていない。「日本文化文学入門」の三年間の実績を踏まえ、メンバーが智慧を出し合い、独自の目次を立て、また対話型の授業が行える方法を考えた。

さらに、海外の大学（特に日本文学に高い関心を持ちながらも研究・教育の歴史が浅い大学）における日本文学教育の現状を知り、教科書製作のための提言を受けるために、二〇一六年十月一日（土）に、青山キャンパス総研ビル第19会議室にて、ワークショップ「海外の大学における日本文学教育の現状と提言」を開催した。ハルミルザエヴァ・サイダ氏（法政大学大学院生）、ナームティップ・メータセート氏（チュラーロンコーン大学准教授）、アンドレイ・ベケシュ氏（リュブリャーナ大学教授）に、それぞれウズベキスタン・タイ・スロベニアの大学における日本文学教育について報告してもらい（所属は当時）、古典文法の解説の必要性、視覚資料や「ことば遊び」の活用、教室内外での教育の連繋の重要性などのアドバイスを得た。

二〇一七年二月に、Ａ４判、八六頁、カラー図版八頁の『留学生のための日本文学入門』を完成した（なお、近代文学については本学非常勤講師の帆苅基生氏の協力を得た）。今年度、「日本文化文学入門」で実際の教科書として使われている。今後、市販も視野に入れながら、より良いものに改訂してゆく予定である。

院生部会報告

二〇一七年度日文院生部会代表

博士後期課程二年　佐藤　織衣

二〇一五年十一月の臨時合同総会において、「日本文学院生の会」は解散することが決定し、日本文学研究科の院生の団体は青山学院日文院生部会に統一された。

院生によって発行されている『緑岡詞林』は第四十号（二〇一六年三月発行）より、体制、装いともに新たに発行されることとなった。発行は、青山学院大学日文院生部会によってなされることとなり、くわえて、本学日本文学科教授、准教授、助教、非常勤講師、及び『緑岡詞林』編集委員に推薦され、『緑岡詞林』編集委員会に支持を受けた者（特別会員）も投稿ができる旨が投稿規定に明記され、幅広い範囲からの投稿が可能となった。リニューアルして二号目にあたる第四十一号には、七本の論文、翻刻、および翻訳紹介が投稿された。また、四十一号から編集委員を日本文学研究科の院生が毎年交代で務めることとなった。

前年度より青山学院大学日文院生部会は、青山学院大学日本文学会春季大会の運営に携わることとなった。五月二十七日に開かれた今年度の春季大会では早稲田大学大学院日本語教育研究科教授・蒲谷宏氏を講師としてお招きし、「日本語の『行動展開表現』における『丁寧さの原理』について」とい

う題でご講演いただいた。研究発表会では、本学非常勤講師・帆苅基生氏が「石川淳『おとしばなし』論」を、博士前期課程一年・松本瑞紀さんが「装丁が語る『春琴抄』―谷崎潤一郎の自装本とその意識―」を発表した。

七月十二日には、修士論文中間発表会が開かれ、今年度修士論文提出予定の四名の院生がそれぞれ発表を行った。今年度の中間発表会には教授、准教授、院生だけでなく、学部生の参加もあり、発表者には修士論文執筆に向けて、その他の院生にとっても良い学びの場となった。

大学院とはどういうところか

博士前期課程一年　**高見　勇樹**

大学院という場は、それまで人から教わるものであった知識を、今度は自らの手で開拓していこうとする――つまり〝研究〟へと昇華させる、その転換点にある場だと感じる。多くの人々が就職を考える中で、自分の興味・関心のある分野についてもっと勉強したい、そして新しい何かを発見したい！　という気持ちが先行した人が大学院に進む。その上で、さらに博士、そして研究職へと進む者もいれば、各課程を修了次第、就職する人もいる。大学院に進学したからといって特別何かに縛られるわけでもなし、あくまで一つの選択肢と捉えればいい。

私が進学を決めたのは、将来的に書く仕事をしたいという強い思い、そのこと自体が理由だといっていいと思う。そのための知識量、またその知識を得ようとする探究心がまだまだ足りない、という判断があって、それを養うための時間と環境が欲しかった、というのが正直なところである。研究対象を江戸川乱歩としたのも、将来的な展望を含めて、推理小説それ自体に興味・関心があることが大きい。

日本文学専攻の博士前期課程に関していえば、二年以上の在学期間に三十単位以上を修得し、修士学位申請論文を提出、そしてその論文の審査・最終試験を経て晴れて修了することができる。三十単位なので意外と楽そうにも見えるだろうが、そういうわけにもいかない。先生によって形式はそれぞれではあるものの、少人数のゼミ形式が主で、頻繁に発表の機会を得ることになる。かつ発表後も、先生や他の院生から高いレベルでの意見・質問が飛んでくるため、それにも対応できるようにしなければならない。加えて大学院生は、授業以外の場でも発表がある。修士論文の発表会は勿論、日本文学会春季大会での研究発表も、院生が主立って行うことになる。大学院生は、常に発表の準備に勤しんでいるといってもいい。

とはいえ、それでも既存のものを学ぶだけでは飽き足らない、つまり〝研究〟をしたいという人にとっては、大変ではあっても楽しくないはずはない。研究室の利用、大学図書館閉架書庫への入庫、教授との関係も密接なものになるし、院生の仲間同士で交流の機会も多い。そうしたことに楽しみを見出せそうだと思ったら、是非とも院進学を視野に入れてみてほしい。

研究レポート

「没個性化」の原理

二C　**川上　大地**

国際基督教大学に進学した先輩に先日食事を誘われ、大学に進学した彼の自己主張の激しさが以前にも増して幅を利かせていたのを知っていた私は誘いを断ろうと一時は考えたが、英国の留学から帰国したばかりの一人暮らしの彼に日本語が恋しいと言われ、とにかく行ってみることにした。そこで、彼は自分の留学での経験談を喋々と並べたのだが、聞いているうちに彼の態度の変化も頷けるような意見があった。彼は、外国にいる間は自分の持っている意見を主張しなければ埋もれてしまう、というような趣旨のことを頻りに私に説いたのだ。もちろん、日本の周囲の人間に眉を顰められているのは承知らしい。彼の態度に一度でも嫌気を差した自分を恥ずかしく思ったし、生粋の日本人的な思考に占められているのを改めて自認した機会だった。

二〇二〇年に東京オリンピックを控え、国を挙げて準備の渦中にある現在の私たち日本人は、政府や都に任せるばかりでまるで傍観者である。日本で開催することが世界共通の決定事項となった以上、国だけでなくそこに住む私たち国民一人ひとりがその国民性を問われる機会を与えられる。そこで問題になるのは、日本人と外国人の間隙に潜む思考方法の差異である。前にも述べたように、日本

人は自己主張に乏しく皆が鋳型にはまった言動を常に胸に留めており、いわゆる「空気を読む」行為を大切にする。しかし、外国人は、場の雰囲気を理解するか否かの問題はあるにしろ、「普通」であることに拘泥はしない。日本人は常時周囲と同化し、「普通」であり続けようとする。これは、逆に取れば「没個性化」と表現できる。

では、どうして日本人が「普通」にこだわり、無色透明な「没個性化」へ収斂したがるのか。それは実に簡単で、つまり変温動物のように周囲に合わせなければまともに生きていけない環境を、自分たちで無意識のうちに作り上げているからだ。特異な人間性は義務教育のうちに均されることにより「浮いて」しまい、結果的にいじめに繋がるのである。

角田光代の小説「空中庭園」（文藝春秋）の中に次のような発言がある。

「私、道徳って恥の概念のことだと思うのよ。そんなの、この国特有のことかもしれないけどね。でもね、禁煙の電車の中で煙草を吸わないのはなんで？　ブランドものがほしいけど万引きしないのはなんで？　若い娘のミニスカートはそそられるけれどいきなり手をつっこまないなんで？　恥ずかしいからでしょう、そんなことしたら」

あまりに極端な具体例だが的を射ている。道徳――つまりモラルが恥さらしにならないための不文律的な常識であったとすれば、私たちは道徳という名目上の建前を構えつつ恥を回避していることに他ならない。しかし、よく考えてみると異を唱えようにも難しい。なぜなら実際に私（たち）は周囲と同じことをすることによって「普通」を装い、個性を殺すのである。

だが、「没個性化」によって得られる一種の静謐と平和を享受しているのは事実である。伊藤計劃のＳＦ小説「ハーモニー」（早川書房）にも、その仮初の静寂に身を委ねている描写が恐怖すらも伴って描かれている。この小説の世界は極端な生命主義によって守られた現在から一世紀ほど経過した世界を描いている。医療都市の先進した日本に生きる人々は、背丈などは違っても全員平均的な体形、痩せても太ってもない、似たような姿をした人間が電車の座席にずらりと並んでいるのである。しかし、この世界ではそれが実際に成立している。現在の日本はこのあり得るかもしれない将来への道を辿っているようにも思える。

家族小説として角田光代が書いた「空中庭園」にあのような発言が含まれているのにも注目したい。家族も人格を形成する上での重要なプロセスである。畑野智美「家と庭」（角川書店）には、「自分の家族を普通と思い込んでいるだけだ。家族に、普通なんてない」とあるが、私たちは両親が双方とも欠けていない一般的な家族を「普通」だと認識している。そのため、「普通」になれなかった敗北者の烙印を捺されたように感じた人は、「没個性化」に拍車を掛けてしまうのである。

日本人の自己主張の貧弱さは生来のものというよりも後天的な環境由来のものだ。未だに疑念が残る「空白の石板（ブランク・スレート）」（人間は元来「空白」であり、生まれた環境などによって形作られるものという近世ヨーロッパの考え方）もあながち間違いとは言い切れない。もし仮に私たち日本人の「没個性化」が経験論に基づくものならば、改善の余地は十分にあり得る。地球規模のグローバル化を生き延びるには、まず自分たちから見つめ直す必要があるだろう。

『万葉集』翻訳研究
――防人歌の韓国語方言翻訳を中心に――

三Ｂ　**ギル　ギュヨン**

文学は越境するものである。その中で日本の古典文学である『万葉集』は日本文学であると同時に、国や言語を超え人類が共有してきた「価値」を探る世界文学として考えることもできるだろう。

特に『万葉集』の防人歌を読むことによって、古代人が大切な人との別れとそれに伴う悲しみにどのように向かい合っていたのかを知ることができる。またその古代人の思いは現代の我々にとっても共感できるものである。本稿では『万葉集』の防人歌巻二十・四三四三番歌を取り上げ、その魅力と方言の特徴を活かした韓国語翻訳を試みたいと思う（なお、『万葉集』の韓国語訳を進めている李妍淑氏の、この歌の訳はまだ出版されていない）。

我ろ旅は　旅と思ほど　家にして
子持ち痩すらむ　我が妻かなしも

右の一首、玉作部広目

この歌について、『新編日本古典文学全集』には、「おれは、旅は旅だとあきらめるが、家にいて子をかかえ痩せておろう妻がいとしい」という現代語訳がつけられている。班田を耕作する農民であったと考えられる作者玉作部広目が、国の命令で愛する人と別れざるを得なかった時の悲しみがこの歌から感じられるだろう。この歌では人間性の深いところまで愛の感情が届いているように思われる。

「かなし」について考えてみよう。『岩波古語辞典』によると、「かなし」は自分の力ではとても及ばないと感じる切なさ、どうしようもないほど切なく愛しい、かわいくてならぬという意味である。さらに、『岩波古語辞典』の編者の一人大野晋氏は、『日本語の年輪』（新潮文庫）で、「かなし」は悲哀だけを表わすことばではなく、自分の恋人をいうこともあり、子供をいとしく思う気持ちを表現することもできたと説明する。自分の力の限界によって立ち止まらなければならないとき、力の不足を痛切に感じながら何もすることができない切ない状態、それが「かなし」であると述べている。このように、「かなし」は単純に悲しい気持ちを表しているだけではなく、より深く相手を考え、愛し、思いやる感情を含めている言葉であることに気を付けて翻訳すべきである。

私は次のように翻訳してみた。

（方言訳）
나의 여행이란 어쩔 수 없는 것이지만 집에서 아이들과 애빗을 부인이 아치스럽다.
nae yeohaengeun/eojjeol su eobneun geos-irajiman/jibeseo aideulgwa/aebis-sulbu-in-iachiseuleobda

直訳：私の旅行は　仕方がないのだが　家で子供たちと　痩せておろう妻のことが　痛ましい。

この歌に用いられている方言は以下である。

①我ろ（我れ）②思（おめ）は（おもへ）③家（いひ）（いへ）（e→i）④子持（め）ち（もち）⑤妻（み）（め）（e→i）

母音の変化が特徴であると考えられる。方言が使われていることによって素朴で素直な印象を与えられる。このような方言の効果を韓国語で表現するために、韓国の南に位置する慶尚道地方の方言を用いてみた。大きな違いは形容詞である。日本語の「痩せている」にあたる標準語の「야위었을（yawieoss-eul）」が「애빗을（aebis-sul）」になり、「かなし」にあたる「애처롭구나（aecheolobguna）」が「아치스럽다（achiseuleobda）」になる。

標準語「애처롭구나」は、『朝鮮語辞典』（小学館）には、ふびんだ、気の毒だ、かわいそうだ、痛ましいと明記されている。「애처롭다（aecheolobda）」とはふびんでかわいそうで切ないという意味である。さらに、この言葉は他人を愛する心「애타심（愛他心）」に基づいた韓国語であり、他人を思いやる「정（情）」という文化の一面をよく表している韓国語でもある。四三四三番歌の「かなし」が表している妻に対する深い愛、切なさを、深い愛に基づく哀れ、悲しさという意味である「애처롭다」で表現したいと思った。

今まで古代日本語が翻訳を通じて現代語になり、さらに標準語として読まれていたことに対して、方言翻訳は新たな挑戦だった。その過程で歌が作られた時代的背景や地域特性、言葉の表現などの考察が必要だった。翻訳はただ言葉を入れ替えるだけではなく、言葉の奥深い世界観を再現する作業である。すなわち、歌の世界観を再現するためには、より豊かな表現の材料を取り入れる工夫が必要ではないか。

今年度の学生の活躍

【二〇一七年度青山学院大学学業成績優秀者表彰】

◇大学院　最優秀賞　呉章娣（博士前期課程二年）

◇学部　最優秀賞　天野早紀（四年）

◇学部　優秀賞　朝山麻衣子（三年）、田部史織（二年）

◇学部　奨励賞　渡辺絵美子（四年）、藤井さやか（三年）、鶴田真由（二年）

【二〇一七年度青山学院大学大学院アーリーイーグル研究支援制

度】
◇新領域創成型若手研究「国文学研究史の再検討―説話学を中心に―」杉山和也（博士後期課程三年）
【第11回全日本ジュニア学生短歌大会（日本歌人クラブ主催、文化庁・毎日新聞社・東京都教育委員会後援）】
◇高校・大学生の部　秀作賞
柳原美月（二年）
雨の中夢を目指して駆け抜ける痩せた背中のきみを見ている
草薙由莉（三年）
それからは緑のセーター着てる人見るたび聞こえるきみのくちぶえ
◇同　優良賞　古谷野雪見（三年）、小牧愛莉（三年）、茅野侑希（四年）
◇同　奨励賞　茂木綾音（二年）、渡邉翼（二年）
【第12回「青山歌壇」（青山学院）】
◇優秀賞　柳原美月、黄郁婷
【「週刊読書人ウェブ」の「書評キャンパス」に書評掲載】
◇安田かおり（二年）［佐藤多佳子『サマータイム』］、荒川美咲（二年）［窪美澄『よるのふくらみ』］、山田力（三年）［似鳥鶏『一〇一教室』］、諸喜田愛理（三年）［歌野晶午『密室ゲーム王手飛車取り』］、佐藤佳音（二年）［朝井リョウ『少女は卒業しない』］
《二〇一六年度》（学年は当時）
【第22回『前田純孝賞』学生短歌コンクール（兵庫県新温泉町・新温泉町教育委員会・神戸新聞社主催）】
◇新温泉町町長賞　黄郁婷（博士前期課程一年）
【第27回上田三四二記念「小野市短歌フォーラム」】
◇一般の部　一席（最優秀）　茅野侑希（三年）

海外で活躍する日本文学科生

留学のすすめ

十六年度卒　**添田　歩**

二〇一六年五月十四日、私は九か月間のアメリカ留学を終えて帰路についた。

アメリカでの日々は、日本にいた時とは比べ物にならないほどの刺激を受けた。大学では文学を中心に言語学や教育学、宗教学などを履修した。ディスカッション形式の講義が多いアメリカで学んだことにより、慣れない言語でも短時間で他人の意見を理解して自分の考えを発信する力を培ったように思う。加えて、現地での普段の生活や、所属した留学生交流サークルでの世界中の学生たちとの交流は、自分の常識が世界では当たり前でないということを教えてくれた。例えば日本への原爆投下についての話になった際、アメリカ人は一度目の原爆投下については悪ではなく、戦争を終わらせる上で必要だったと認識していた。考え方の違いに触れたことで、いかに自分が今まで狭い世界で生きてきたかということを強く感じた。

そもそも留学のきっかけのひとつは大学三年の時、源氏物語など日本文学の原文と、翻訳された英語版を比較研究する緑川先生のゼミを履修したことだ。英訳された文学作品に触れたことは海外への思いを強くした。

原文との対訳の比較で、日本語と英語では時折表現が大きく異なること、さらに日本人としては違和感のあるその表現が英語圏の人々にとっては適切な表現であることを知り、なぜそのような差異が発生するのかという疑問から実際に国外の様子を見てみたいという気持ちが大きくなったのだ。恥ずかしながら私は真面目な学生ではなかったが、日本文学科の国内志向が強い雰囲気のなかで国外への好奇心を抑えきれず最終的に留学する方向に舵を切った。

ただ大学三年は、留学を志す時期としては少し遅い。すぐにIELTSを受けたがスコアが手元に届いた頃にはすでに交換留学の申し込みは締め切られていたため、一年の休学と認定校留学を決めた。認定校留学は自ら留学先を探して手続きをする必要があるため、大学と提携している留学斡旋財団法人に学校探しをはじめ、留学関連のサポートをお願いして、留学先を決定した。私の当時の英語のスコアで留学でき、また留学のきっかけとなった文学や、海外での日本語の受け取りかたを知ることのできる日本語の講義があるアメリカ、ノースカロライナ州のアパラチアン州立大学である。アメリカを希望したのは、世界で強い力を持つ国のため、世界中から集まってくる人たちと交流できるのではとの考えからだった。

そして大学四年の八月に渡米した私は学業に励んだことはもちろん、アメリカで日本語の講義のTAを務めたり、世界中の留学生たちとイベントを企画したりなど今回指定された文字数では書ききれないほど多くの経験を積んだ。帰

国後大学四年生の後半をスタートさせた。就活ではすでにＥＳのエントリー解禁後だったために後れをとっていたが、複数ある留学者向け合同説明会・面接会に出向き、比較的すぐに内定を得ることができた。

　現在私は大手ＩＴ系機械メーカーで営業として働いている。仕事は宇宙や国家安全保障に関わるもので、パートナー企業が海外の企業であることも多く、入社三か月目にして英語のメールや、会議に出ての通訳や資料の翻訳をすることとなった。そもそもこのような普段の業務から察するに、競争率が高かったにも関わらず希望していた部署に配属してもらえたのも留学経験があったからかもしれない。入社半年がたった今も研修中ではあるが、充実した毎日を送っている。両親をはじめ、留学にあたって力を貸してくださった方々には感謝してもしきれない。

　物事を始める時期に遅いということはない上、諦めなければ道は開ける。留学に際し、私には就活・教職課程・金銭面という三つの懸案事項があったが、結果的にこれらとは折り合いをつけられた。一年休学する必要があったが、就活に関してそれはむしろプラスだった。教職課程との兼ね合いは、教務課と事前に相談することで親身に対応していただいた。また、金銭面に対しては給付型の奨学金制度を利用させていただき、非常に助けられた。

　留学をしなければ出会えなかった、世界中に散らばるかけがえのない友人たちを得て、多様性という名のもと自分の常識を容赦なく壊され、考えを改めざるを得ない経験をすることは、必ずあなたが人生を歩むうえで大きな強みとなる。留学に興味を持つ方々にはその強みをぜひ、怖気づくことなく身につけにいってほしい。

インドネシアで日本語を教えて

四Ａ　**溝口　明**（めい）

　私は二〇一六年二月二十二日から三月十一日までの三週間、国際教育交換協議会（ＣＩＥＥ）主催のインドネシア「日本語クラスサポート」の活動に参加しました。当時の私は学部二年生でしたが、「日本語教育概論Ⅰ・Ⅱ」の授業を通して、アジアの国々で日本語教育が活発に行われていることを学んでおり、その様子を実際に自分の目で見てみたいという思いがありました。そのため、インターネット等で日本語教師のボランティアやインターンシップの情報を収集し、複数のプログラムを比較した上で、現地の一般家庭でホームステイをしながら日本語を教えるこの活動への参加を決めました。

　インドネシアに到着後は、現地受け入れ団体Dejavato foundationのオフィスで、生活一般と言語、宗教に関する研修を受けました。特に宗教についての研修では、インドネシア国内で「あなたはどの宗教を信仰していますか？」という質問を受けた際に、「無宗教です」と決して答えることがないようにと指導を受けました。なぜなら、インドネシアはイスラム教を主として、キリスト教や仏教など、全国民が必ず一つの宗教を信じているため、無宗教と答えることは非常識かつタブーであったからです。この説明を受けながら、その時の私は、これまで経験したことのない本当の異文化の中に飛び込もうとしているのだと強く感じていました。

　研修終了後は、ジャワ島北部のパティ県の小学校に派遣され、日本語と日本文化を紹介する授業を一人で行いました。この小学校にはムスリムの子どもたちのみが通学しており、他にも幼稚園や中学校、高等学校が同じ敷地内にありました。

　私は週六日間、平均して一日に三、四回の授業を行っていました。授業といっても、現地に日本語の先生はおらず、子どもたちは日本人を見ること自体が初めてであったため、最初は簡単な挨拶や数字、日常生活に関わる語彙などを教えていました。また、意外なことにインドネシアでは折り紙が普及し、子どもたちに人気の遊びの一つとなっていたため、授業中に

日本から持参した模様つきの折り紙で鶴やかえるを作ったこともありました。

午後からは、お弁当屋さんをしているホームステイ先の仕事を手伝ったり、近所の子どもたちと一緒に遊んだりして過ごしていました。また、ホストファミリーが信仰しているイスラム教に関わる行事を見学したり、地域の結婚式やお葬式に出たりしたこともありました。

私が生活していた村では、人々の行動の多くはイスラムの教えを軸としていたように感じました。礼拝の音楽は、早朝から鳴り始め、ホストファミリーは別室でお祈りをしていました。喃語しか話さないような小さい子どもでも「神は偉大だ」という意味のことばを言うことができ、母親はそれを非常に褒めていました。また、インドネシアで生活する大学生が、恋人を選ぶ条件として、宗教が同じかどうかは重要な問題だと真剣に話してくれたこともありました。

日本から遠く離れたインドネシアで私が最も強く感じたことは「感覚」と「環境」が異なる場所で生活することの難しさでした。日本に留まっていれば個人差こそあれ、そこまで大きな常識の差を感じることはあまりありません。しかし、私がこれまで信じてきた「常識」はインドネシアの非常識であることも多く、どう行動すれば良いか選択を迫られ、気が休まらないような日々であったことは事実でした。そんな私がインドネシアでの生活を通して暫定的に出した答えがあります。それは、「異文化を超えて互いに共有できる感情は何か？」と常に考え続けることです。そして、人とかかわる時に大切なことは、自分の考えは伝えるが、絶対に感情的にならないこと、敬意と感謝を言語でも非言語でも表現する努力をするということです。

近年、ムスリムに対する偏った見方をする人々がいることが指摘されるようになっています。人がカテゴリー化によって世界を認識しようとしてしまうことは、ある程度は止むを得ないことなのかも知れません。しかし、その判断によって、貴重な出会いや発見の可能性を台無しにしてしまうことは、あまりにも勿体ないことのようにも思えるのです。

私自身、浅い人生経験や勉強の足りなさで、世の中のこと、世界のこと、人間の気持ちのことなど、全く知らないに等しいと考えています。だからこそ、自分の足で、興味を持った世界に飛び込もうとする努力だけは今後も続けていきたいと考えています。

日本文学科留学生の動向

日本文学科教授　**佐伯　眞一**

日本文学科は、もともと国際的な学科をめざして創設されました。国際化の時代を迎え、日本文学や日本文化を学ぼうとする留学生は年々増加しています。外国から日本に学びに来るのなら、どの学部学科よりも日本文学科で学びたいというのは、考えてみれば当然のこととともいえるでしょう。

二〇一七年五月現在で、文学部日本文学科在籍の私費留学生は全部で二九名、そのうち二〇一七年度の入学者は八名です。国籍別では、近年、中国籍（台湾を含む）の入学者が増えています。五年ほど前から、一年次では「日本文化文学入門」という科目を履修するように指導していますが、昨年度、この科目で使用するテキストとして、『留学生のための日本文学入門』を作りました。日本文学科教員七名と英米文学科の西本あづさ先生が執筆し、青山学院大学大学教育改善支援制度の支援を受けて製作した、全九六頁（図版を含む）の冊子です。二〇一七年度から、このテキストで授業を進めています（授業の担当者は、本年度から佐伯眞一）。なお、この他に交換留学生が短期間の留学で、さまざまな授業を受講しています。

大学院にも留学生が増え、それぞれに活躍しています。国費留学生のボニー・マックルーアさんは、博士後期課程に進み、二〇一六年十一月には和歌文学会、二〇一七年度六月には俳文学会、一一月には中世文学会と、日本の代表的な学会で次々と和歌・連歌関係の研究発表をしています。前期課程在学中の呉章娣さんは、二〇一六年度の成績が優秀で、学業奨励賞を受賞しました。前期課程在学中の黄郁婷さんは、「第22回『前田純孝賞』学生短歌コンクール」で、「新温泉町町長賞」を受賞しました。

また、留学生には、上級生がチューターとして指導にあたることになっています。二〇一七年度

は、中島正揮・李嘉媛・枝根美咲・梁祐慈の四名がチューターを務めています。教員とチューターは、留学生と共に、年に二回ほど文化交流活動を行っています。例年春には懇親会を開催、また秋にはあちこちの見学に出かけます（二〇一六年度は根津美術館や歌舞伎座などを見学しました。二〇一七年度も留学生の意見を聞きつつ企画中です）。写真は二〇一七年度春の懇親会です。大学近くで、にぎやかに行われました。

履修登録や受講の指導から交流活動まで、留学生にとってチューターは常に必要です。興味のある在学生は、是非やってみてください。

現在のチューターの中島君から、最後に一言。

チューター活動の魅力の一つは、留学生との交流の中で、自国文化に対し新たな発見が得られることにあります。今まで気づかなかった日本文化の側面や、また外国から日本がどのようなステレオタイプを持たれているのかなど、留学生との交流は日常生活から言葉に関することまで様々な発見を与えてくれます。

チューターの活動は堅苦しいものではありません。留学生と仲良くなりたい人、また異文化交流や自国文化に関して興味のある人など、是非気軽な気持ちでやってみてください。一緒に活動を盛り上げていきましょう！

卒業生・4年生からのメッセージ

就職活動体験記（東京都公務員）

四C　**永本　壮一**

大学二年生の冬、キャンパスで開催されていた公務員ガイダンスに参加した事がきっかけで、私の公務員試験の勉強生活が始まりました。社会人になるなら、沢山の人の役に立つような仕事に就きたいと考えていたこともあって、広く社会問題の解決に取り組み、多くの人々の生活を支えることが出来る公務員は、自分に合っていると考えたのです。

しかし、私にとって、公務員試験の勉強は楽なものではありませんでした。試験の科目が今まで勉強したことのない法律や経済理論、行政学などで構成されていたためです。勉強を始めたばかりの頃は、テキストをめくるたび、初めて目にする文言がずらりと並んでいて、内容を理解するだけで、大変でした。そのような勉強が嫌にならないように、私は、一日の学習ノルマを決めて、毎日学習をしていました。短時間集中で勉強して、ノルマを達成したら、そこで勉強を終えて、全力で息抜きに努めました。こうして毎日少しずつ勉強を続けると、始めのうちは分からなかったことも、段々と理解が出来るようになってきて、どの科目に対しても苦手意識を持たずに試験を終えることができました。

筆記試験後の面接対策にも苦労しました。筆記試験が通るまで面接の練習は熱心にしていなかったこともあり、右も左も分からない状態で、非常に焦りました。大学の進路・就職センターや近所のハローワークに足繁く通い、面接の雰囲気に慣れる練習をしました。また、同じ公務員を目指す友人とお互いに面接練習をしつつ、面接官の質問に落ち着いた回答が出来るように、想定質問とその質問への自分の回答を書いた一覧表を作って面接に臨みました。実際の面接では、一覧表の質問はなされませんでしたが、再度、自己分析や業務内容を調べるための、良い機会となりました。自己分析や志望機関についてより考えたからこそ、合格を頂けたのかもしれません。

この一年半の公務員試験生活を振り返ると、改めて沢山の人に支えてもらったことを実感しています。試験中に悩みや不安で一杯だった自分を励ましてくれた家族や友人、先生たちがいてくれたからこそ、最後までやり抜くことが出来ました。この恩を満足いく結果という形で返すことが出来ることを嬉しく思います。

就職活動体験記（一般企業）

四B　**佐藤みなみ**

この体験談が少しでも皆さんのお役に立てれば幸いです。ここで私の就職活動を振り返ってみたいと思います。

「先輩方も内定をいただいたのだから、きっとどうにかなるだろ

う」という安易な気持ちで、三年生の前期から学内の就活基本講座に参加しました。これが就職活動のスタートでした。

講座を通じて就職活動を理解できた気になった私は、それ以降ゼミの掛け持ちで忙しいことを言い訳に、特に何もしない日々を過ごしました。そしてあっという間に十二月を迎えてしまいます。周囲を見渡すと、土日に学外の就職セミナーに参加する友人や公務員試験に向けてこつこつと勉強をする友人、中にはインターンシップを経て選考に進む猛者までいました。

さすがにこれではいけないと我に返り、業界地図を見ることから始めました。自分自身、興味を引かれる業界の少なさに驚きましたが、「社会の役に立っていることが目に見えて分かる仕事」「なるべく多くの人に貢献できる仕事」という二点をポイントに、その条件に合う業界を探し、インフラ系を志望することにしました。

ESを書き始めると、日本文学科での学びで培った文章力が武器となることに気が付きました。私たちは日頃のゼミ発表や期末レポートを通じ、苦労しながら自分の考えを相手に伝える練習を重ねています。そのため、題材は異なっても作業の内容はほぼ変わらないと感じました。

また、初めての面接では話すことの難しさを痛感しました。頭では言いたいことがまとまっていても、言葉にするとなると案外うまくいきません。それ以降はノートに想定問答集を作り、実際に声に出して話す練習をしました。

就職活動中はどんなに対策をしても、またどんなに順調に選考が進んでいても不安がつきものです。自分の対策が正しいかもよくわからず、面接の控室で顔を合わせる学生は皆優秀そうに見えて焦りも募りました。しかし、今になって思えば、不安を解消しようとする気持ちが就活対策をするエネルギーに繋がっていたため、それはむしろ良い事だったのだと思います。

今だからこそ言えますが、いろいろな企業を見たり他大学の学生と交流したり、楽しい就職活動でした。

教員になるまで

足立区立鹿浜菜の花中学校勤務

十四年度卒　**門脇　絢子**

青山学院大学文学部日本文学科

の卒業生として、私自身の教員採用試験体験をお話しいたします。

私が本格的に教員を志したのは実は大学三年になった頃です。入学当時から学校教育に興味があり教職課程は履修していましたが、実際に就職となると、採用試験に向けた勉強や面接、模擬授業の対策が不可欠です。

三年生の夏頃、まずは採用試験対策のテキストを購入し、筆記試験の対策を始めました。教職教養や専門教養の勉強を少しずつ進めていましたが、学科の授業やサークル活動にも時間を割いていたため、なかなかはかどりません。そして、周りの友人が就職活動を始める十一月頃になってからいよいよ焦り始めました。筆記の勉強はいいとしても、小論文や面接、模擬授業などはどうやって対策したらよいのか、非常に不安でした。

このとき、同じ志を持つ仲間に出会えたことが幸運でした。十二月頃、国語科の教員を目指す学生が集まる「日文塾」という勉強会があることを知り、すぐに参加を決めました。その勉強会では日文の学生のみならず、大学院生の先輩や、教育学部の学生、教員として働く卒業生の方とも知り合うことができました。論作文を書いてお互いに添削し合ったり、模擬面接や模擬授業を評価し合ったりして勉強しました。論作文や面接、授業は自分一人では長所、短所が分かりません。他者の目で見てもらうことで改善点が明らかになり、少しずつ自信が持てるようになりました。

四年生の七月にある採用試験に向けた半年強の期間、繰り返し過去問を解き、論作文や面接については仲間とともに勉強を進めました。この期間は卒業論文の準備、教育実習などもあり忙しくなる時期です。私の経験から、①大学の予定や実習なども鑑みて計画的に準備を進めること、②仲間を見つけて勉強すること、の二点が重要だと考えます。

現在私は都内の区立中学校に勤務しています。学校には驚くほど個性豊かな生徒たちがいます。始めはイメージとのギャップに苦しんだこともありました。今年度は初めて学級担任も任され、さらに生徒との深い関わりをもつ機会が増えました。私はいつも、勤務校のベテランの先生からいただいた

「ストライクゾーンを広く持とう」という言葉を思います。生徒の個性は十人十色、生徒と関わることで、教員自身も成長します。教員は人を育て、その努力が自らの成長として返る、そんな仕事だと感じています。

日本文学特講A（夏期集中講義）

三B　北住　悠

本年度の夏期集中講座（日本文学特講A）では脚本家や小説家としてご活躍中、かつシナリオセンターで講師も務めていらっしゃる柏田道夫先生に「シナリオ表現を学ぶ」と題した講座を開催していただきました。先生は本学日本文学科の卒業生でもいらっしゃいます。なお内容としてはシナリオについて受動的に学ぶだけではなく、実際に書き、それを先生に添削をしてもらいながら、「最終的に一本のシナリオを書けるようになる」という到達目標が設定されていたため、非常に実践的な四日間の講座となりました。

一日目は劇における台本から小説、そして映像作品における脚本という変化の経路や、米ハリウッドによって生み出された映画制作の分業化など、脚本とそれを取り巻く映画の歴史について学びました。また「ト書」や「柱」といった脚本を書く際に必要な、具体的な知識を確認した後に、決められたシチュエーションと人物設定を基にシナリオを書くということにも取り組みました。そして翌日までの課題として、シチュエーションのみを指定された脚本の制作も行いました。

二日目はシナリオにおける映像的な特徴、例えば「カットバック」や「回想法」といった映像に特有の表現方法と、いわゆる物語における型、そしてキャラクターの造形について解説を受けました。そして再び決められたシチュエーションを基にシナリオを書くことにも取り組みました。

三日目は初めに、先生が脚本家になられたきっかけをお話ししてくださりました。この時先生は『物語欲』というものが人間にはあるため、私たちは文学研究や映画鑑賞を好む」ということを強調され、受講生に向けて「物語を供給する側に立ってほしい」というメッセージがありました。次に映画の構成について具体例を踏まえながら学習した後、ネタ探しのポイントや映画の売りとなるモチーフについて、その立て方を学びました。

最終日となりました四日目には、前日に説明を受けた映画の構成についてより理解を深めると共に、キャラクターのディテール（例えば些細な生活における動作など）の映像における有効な描き方について指導を受けました。

先生は映像の技法について説明する際などは具体例として、『羊たちの沈黙』（一九九一）や『グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち』（一九九七）、『リトル・ミス・サンシャイン』（二〇〇六）、そして先生が脚本をご担当なさった『武士の家計簿』（二〇一〇）のDVDを使い、それらの映像を実際に鑑賞しながら、各技法の確認などを行いました。また先述のディテールの実例を見る際は、先生が『阿修羅のごとく』を朗読しながら説明してくださいました。理論とその実践の対応がすぐに行われたため、たとえ映画に関して技法の観察を行ったことがない学生でも、技法の理解を問題なくできたのではないかと思われます。

今回の講座では、シナリオの書き方という普段の授業では学ぶことが出来ないものを習得することができるだけでなく、柏田先生に作品を添削をしていただけるということもあり、二十四名もの学生が履修しました。さらに特筆に値するのは、その中において日本文学科以外の学生がかなりいたということです。どの学生も映画に対して造詣が深く、それぞれ異なった観点を持っていました。

最後に個人的な所感となり恐縮ですが、私は以前から小説を書くことを趣味としており、それがきっかけで今回の講座を受講しました。そのため、この四日間の経験と最終課題のシナリオ制作に集中的に取り組めたことは、私の創作に対する姿勢にとって大きな刺激となりました。私のように、先生のおっしゃる「物語欲」に誘われて創作活動に関心を抱き、履修をした学生は少なくないはずです。彼らがこの講座を契機に感奮興起し、創作活動を本格的に開始し、脚本家や小説家としてデビューする日もそう遠くないかもしれない、そんなことを予感させてくれる四日間でした。

研究室探訪

山本啓介先生篇

★こんにちは。早速ですが、先生は、何を専攻して研究なさっているのですか？

主に和歌や連歌ですね。時期で言うと、鎌倉時代から室町時代です。現在はその中でも、室町時代を中心に研究しています。

★では、その分野を専攻しようと思った理由やきっかけは何だったのでしょうか？

元々は近現代文学をやりたくて大学に入ったんです。でもいつの間にか和歌に興味を持つようになりました。和歌ってちゃんと勉強しないと分からないのだなとふと思ったのがきっかけです。

初めは「どうして字が余っているのだろう」という疑問から、字余りの歌をやっていました。そのうちに和歌は人前で発表するものであることから、どのように発表されていたのかを調べるようになったのですけれど、資料がそれ以前の時代より室町時代の方が多かったのです。だから自然と、室町時代の和歌を専攻するようになったのではないかと思います。

★山本先生は和歌を専攻なさっているということですが、和歌を楽しむにあたって、何かおすすめの本はありますか？

そうですね。最初に読むのにいいのは、鈴木健一先生の『古典詩歌入門』（岩波テキストブックス）とか、ＮＨＫの番組にも出ていらっしゃる渡部泰明先生の『和歌とは何か』（岩波新書）などでしょうか。この辺りは千円から二千円という手頃な値段で手に入りますし、また和歌の入り口として読みやすく、勉強になると思います。

★先生にとって和歌が面白いと思うのは、どんなところでしょうか？

和歌って基本的には三十一文字で言葉を省略しないといけませんよね。ただ、彼らはその中で和歌を雅なもの、美しいものとして詠もうとはしていて……。だから言葉を色々と省略をしてはいるのですけれど、そこは読んでいる我々が補いながら、彼らが何を描きたかったのかを読み取る努力をするんです。そうすると、何となく和歌を詠んだ昔の人々と繋がったような気持ちになれる。昔の価値観に触れられたような気がする。それが和歌の面白いところだと思います。

★先生が一番好きな和歌は何ですか？

いくつかありますけど、『新古今和歌集』の藤原家隆の歌が好きな和歌の一つです。

「思ふどち　そことも知らず　行き暮れぬ　花の宿かせ　野辺の鶯」（春上・八二）。

これは春の歌ですね。「思ふどち」とは仲の良い友達のこと。この歌で彼らは、野遊び、今で言うところのピクニックに行ったのですが、仲の良い友達とどことも決めずにさまよっていたら、いつの間にか日が暮れてしまった。だから今日は、花の下に宿を貸してください、野辺の鶯よ、という意味になります。まあ、つまり野宿をすることになったわけなのだけれど、花の宿の主人は鶯なので、彼らは鶯に向かって花の下を宿として貸してくれるようお願いしているというわけです。実際には、彼らは野宿のようなことをしたりはしないので、想像して詠んだ歌ということになりますけどね。

『新古今集』の歌はどちらかと言うともの悲しい歌が多いのです。それはそれで良いのですけれど。でもこの歌はとてもおおらかで優しい雰囲気の和歌なので、そこが好きなところですね。勝手に花の下を占拠してしまうのではなく、鶯にちゃんと貸して欲しいと頼むところが、読んでいて趣があり、あたたかい感じがします。

今回は好きな歌の一つとしてこれをあげましたけれど、もの寂しい歌にもいいものはたくさんありますよ。

★研究室には週にどのくらいいらっしゃいますか？

授業がある時が主なので、週に二回ほどですね。でも会議がある時は一日増えて、週三回になります。

★では、研究室にはどのくらいの本がありますか？

まだ来たばかりなので、あまり置いてありませんね。すぐに必要になるものだけを入れている感じです。

自宅の方には本がそれなりにあります。本棚が……十架ほどになりますかね。

★研究室の中でお気に入りの本を一冊選ぶとしたら、何かありますか？

まだ、本自体があまり多くないのですけれど……。そうだ、お気に入りというわけではないですが、『新撰菟玖波集 全釈』（室町時代後期の准勅撰連歌撰集『新撰菟玖波集』の注釈書、三弥井書店）でしょうか。これは、私が学生の頃から原稿を書かせてもらっていたんです。確か第四巻くらいからお手伝いしながら、最後までやりました。だから、思い出深いものではありますね。

★一年生はまだ研究室というものが、よく分かっていないと思うのですが、どのようなことをするのか教えていただけますか？

ゼミとは何かということですよね。一年生はまだ講義を受けることが多いのではないかと思います。講義というのは、大抵受け身で先生のお話を聞くことになります。でも研究室は、そういう風に一方的に話を聞くのではないのです。自分で調べて、勉強して、考えて、それを発表する場です。他の学生と話し合ったりして、時には先生や先輩に駄目出しをされたりしつつも、試行錯誤を繰り返していくことで学問を深めていくのです。高校までの授業と明らかに違うのは、人から言われて何かを学ぶのではなく、自分で勉強していく場所であることでしょう。

研究室の人数はさまざまです。人気があって、多いところでは一学年一〇人とか、もう少し多いくらいになるかと思います。

★学内でも学外でも良いのですが、好きな場所というのはありますか？

学内も随分様子が変わってしまいましたからね……。あ、でも冬になるとクリスマスツリーができる、ロータリーの辺りの木の下でベンチに座って、のんびりするのは好きでしたね。

学外だと温泉です。温泉巡りが好きです。いくつか好きな温泉をあげると、神奈川県にある箱根湯本の天山や新潟に長くいたので弥彦温泉などが思いつきます。それから印象深いと言えば、兵庫県の有馬温泉もあります。有馬温泉は、日本で古くから歴史のある温泉の一つで、昔から色々な人が湯治に行ったりしていたそうなので。あとは群馬県の草津温泉ですね。

★宝物は何かありますか？（例えば自宅が火事になったとして、一つだけ持ち出せるとしたら何にしますか？）

やっぱりハードディスクに入れている今までの研究データですかね。あれがなくなると困りますからね。

★では、最後に学生に向けてのメッセージをお願いします。

人から何かを教えてもらうという点では、高校と大学は一緒です。でも、大学ならではと言えるのは、自分自身で興味を持ったことを調べて、考えて、それを発表したりするところです。自分で仮説を立てて、でもそれはたいていの場合、間違っていて、それでもそれを何回も繰り返していくことで、ほんのちょっとでも自分なりの何かの説を立てる。それが大学という場で学ぶにあたって一番大切なことになってくるのではないかと思います。受け身であってはいけません。まだみなさんは入り口に来たばかりですから、間違っている時の方が多いとは思いますが、自分なりの考えを突き詰めていくことで、大学で学ぶ本当の「学問」ができると言えるのではないでしょうか。最初は臆病になってしまうとは思いますが、積極的に色々なことをやって欲しいし、それが学問の楽しさであるのだろうと思います。

日本文学科関係書籍

＊二〇一六年四月から一七年十月までに出版された日本文学科専任教員、日本文学科・大学院日本文学専攻卒業生が出版した日本語・日本文学・日本語教育に関する書籍を紹介します。未掲載の書籍については情報をお寄せください。

《二〇一六年》◆飯田晴巳他監修『品詞別学校文法講座』第五巻・第八巻（明治書院、四月）◆土方洋一他編『〈物語史〉形成の力学』〈新時代への源氏学8〉・『架橋する〈文学〉理論』〈新時代への源氏学9〉（竹林舎、五月）◆藤井史果『噺本と近世文芸 表記・表現から作り手に迫る』（笠間書院、五月）◆小川

靖彦編『萬葉写本学入門』（笠間書院、五月）◆片山宏行他監修、若松伸哉・掛野剛史編『菊池寛現代通俗小説事典』（八木書店古書出版部、七月）◆吉田昌志『泉鏡花素描』〈近代文学研究叢刊〉（和泉書院、七月）◆佐伯真一他校注『予章記』〈伝承文学注釈叢書〉（三弥井書店、十月）◆篠原進他編『ことばの魔術師西鶴 矢数俳諧再考』（ひつじ書房、十一月）

《二〇一七年》◆土方洋一他編『メディア・文化の階級闘争』〈新時代への源氏学10〉・『制作空間の〈紫式部〉』〈新時代への源氏学4〉（竹林舎、三月）◆清水眞澄『戦国時代と禅僧の謎 室町将軍と「禅林」の世界』（洋泉社、三月）◆廣木一人教授退職記念刊行委員会編『日本詩歌への新視点 廣木一人教授退職記念論集』（風間書房、三月）◆トークィル・ダシー、青山学院大学文学部日本文学科編、小川靖彦企画『『万葉集』における帝国的世界と「感動」』（笠間書院、三月）◆佐藤泉他編『漱石辞典』（翰林書房、五月）◆藤川雅恵編『御伽百物語』〈三弥井古典文庫〉（三弥井書店、六月）◆片山宏行『菊池寛随想』（未知谷、八月）◆永池健二編『梁塵秘抄詳解 神分編』（八木書店、八月）◆和久希『六朝言語思想史研究』（汲古書院、九月）◆佐伯真一他校注『四部合戦状本平家物語全釈 巻十一』（和泉書院、十月）

日本文学科同窓会から

一味違う日文同窓会

1971年卒　戸田正彦

今から十五年前、二〇〇二年九月二十三日、大学同窓祭の当日に、文学部四番目・大学十四番目の同窓会として、青山学院校友会 大学部会 日本文学科同窓会は設立されました。前年の暮れに日本文学科創設三十五周年の記念行事があり、その時の実行委員が主体となり、武藤元昭教授（当時）の肝煎りで設立にこぎつけました。その時作成した設立案内には、基本方針として次の3点を挙げています。①生涯学習の機会となる、②私たちが創る、私たちの会にする、③教養も、エンターテイメント性もある潤いのある企画を提案する。やや気負いもありますが、生涯学習をキーワードに、単に昔を懐かしむだけの同窓会とは一味違う日文同窓会になろうとしたわけです。

もちろん今でも変わらぬ意気込みで活動していますが、設立翌年二〇〇三年に創刊した日本文学科同窓会報『ひぃふぅみぃ』（現在十三号）では毎号二頁に亘り活動の一端を報告しています。近くは目白文士村・田端文士村への文学散歩や同窓生の直木賞作家姫野カオルコ講演会など話題の企画がありました。また、昨年の日本文学科創設五十周年行事の実行委員一〇〇人のうち多くが、新たに同窓会理事や新設のオフィシャルサポーターに就任して、より充実した陣容となり、まさに潤いのある企画を立案しています。

一方過日は、二、三年生対象の「就職なんでも話せる会」を初めて実施しました。同じ日文の先輩・後輩だから訊ける、話せる本音を語る会になり有意義な企画となりました。さらに、日本文学会秋季大会では、同窓生の藤井彩子さん（NHK）の講演もあり、今後は後輩の学生諸君との協働を視野に、日本文学科、日本文学会との連動企画を同窓会活動の軸にしたいと願っています。

日本文学科は他学部、他学科と比較して卒業生の人数は決して多くはありませんが、実にバラエティ豊かな人材の宝庫と云われています。芸能、マスコミ、教員、作詞家、脚本家、金融ビジネスマンなど、いろいろな業界で活躍する同窓生が集まり、生涯学習の機会となりつつ日本文学科を盛りたてていけたら良いと思っています。

篠原先生を送る

研究室を訪ねて
――学生インタビュー――

★早速ですが、研究室にはどのくらいの頻度でいらっしゃいますか？

ほぼ毎日来ています。早朝の時もありますし、数分しかいないこともあります。

★研究室にはどのくらい本がありますか？

どのくらいあるでしょうか……。書棚は満杯ですし、置けない本は足元に積んであります。数えたことはありません。昔は個人研究費で購入した本は退職時に戻す規定になっていましたので、その時になって慌てないように七、八年前の調査の際に全部図書館に寄付してしまいました。段ボール箱で、一二、三個くらいあったでしょうか。少し不便ですが自分の買った本を読むために時折図書館に出向いています。論文を書くときなどは自宅の本を使っており、研究室の本は専ら卒論やゼミで使ってもらうためのものです。所有ということにこだわりがないので、村上春樹のものなどベストセラー本は欲しい人に差し上げています。必要な人に使って頂くのが一番ですからね。

★篠原先生が専攻されている分野は何でしょうか？

江戸時代を中心とした古典文学です。

★著名な研究会を主宰なさっていると仄聞しましたが？

主宰というと大袈裟ですが、浮世草子研究会と西鶴研究会ですね。二つとも発足して三〇年近くになります。東大などの院生に慫慂されてはじめたもので、私の研究室でドンクのパンをかじりながら浮世草子を読んでいました。六人ほどの院生は数年後全員が有名大学の教員になり、長谷川強、冨士昭雄といった斯界の大御所が加わったこともあって大きな組織になりました。今でも月に一回、本学で研究会を開催しています。

前者が注釈的にテキストを精読するという集まりなのに対し、西鶴研究会はそれを前提とした上で、どんな新しい読み方やテクスト分析が可能なのかを模索し、議論する会です。中心は現場の大学教師。エビデンス本位で二五分という学会のスタイルに不満を持つ若い研究者たちの要望に応えて、こんなグループが出来ました。頼まれると断れない性格ですので何かと損をしています（笑）。これも最初は一〇人前後のメンバーで細々とやっていたのですが、次第に参加者が増え、今では全国の西鶴学者が名を連ね、多い時は一〇〇人ほどの最前線の研究者が春休みと夏休みに、青山学院に集います。

二つの会のコラボで生まれたのが、『西鶴と浮世草子研究』（全五巻・笠間書院・二〇〇六年～一一）です。先日私の定年退職を記念した本の企画も提案されたのですが、お断りしました。記念誌的なものより、挑発的で刺激的な本を作りたいですからね。

★その分野（近世文学）を専攻しようと思った理由は何でしょうか？

評論をやりたかったのですが、すぐに変更しました。高等部の講師をなさっていた武藤元昭先生（元・学長）が日本文学科に着任され、西鶴のゼミをお持ちになったからです。西鶴研究の泰斗で「鬼の野間」と呼ばれた京都大学の野間光辰仕込みの厳格な考証。学問的な面白さと、若い教員ならではの「熱」に圧倒されました。とんがった全共闘（全学共闘会議）世代に江戸という前近代の世界は新鮮で、大学のロケーションを生かして、近くの国立劇場や歌舞伎座で連日のように歌舞伎や浄瑠璃を観ていました。歌川国芳の浮世絵に強く魅かれたのもこの頃です。

★高校と大学では文学の捉え方についてどのような差異があると思われますか？

高校時代、国語の先生が「この小説は普通に読むとこう読めますが、少し角度を変えるとこんな読み方もできます」とおっしゃったことがありますが…。ない…。教室ではそんな余裕がないんですね。ただルビンの壺のごとく、優れた文学は例外なく多義的ですし、村上春樹も「同じ題材でも少し角度を変えれば、ずいぶん違ってみえる」（『騎士団長殺し』）と述べています。多義性というのは、虚構を前提とする文学ならでは特質であり、奥行きなのです。

★その差を踏まえて、どのようなモットーをもって授業をされていますか？

研究も大切ですが、教師にとっ

ては授業がすべてです。なので教室に入る時はいつも緊張します。なぜなら、そこは決してやり直しが利かない教師と学生の一回的な出会いの場だからです。そのためには周到な準備が不可欠。たとえば、文学史。二八歳の時から四〇年近く担当し、テキストを書いたこともあるのですが（放送大学テキスト）、どこまで行っても完成形がありません。大筋はともかく、細部に関しては最新の研究成果を踏まえて毎年のように書き換えを余儀なくさせられています。でも学問とはそんなものです。常に旬な、生き物としての文学史。そうした内実を念頭に、受講してみて下さい。

★篠原先生は春季大会や他の授業でも現代小説を引き合いに出されていますが、近年出版された現代小説で特におすすめしたい作品はありますか？

古典文学の教師と現代小説。ふしぎな取り合わせですが、これには事情があるのです。「國語と國文学」（二〇一三・一〇・東京大学国語国文学会）にも書いたのですが、私の特講はずっと金曜日の三時間目でした。昼休みが長引き、どうしても遅れてくる学生がいる。無視しても良いのですが、講義にはそれなりに脈絡があるので、途中からでは分からない。そんなことで毎回話題の本や映画について話しながら受講生を待っていたのですが、それが意外に好評で結局「ベストセラー論」を講義することになりました。ただ、準備が大変です。多くの参考文献を読み自分なりの理論を組み立てるのは当然としても、毎日のリサーチが不可欠。そんなことでここ一〇年ほどは有楽町駅前の大型書店で話題の本を毎週二、三冊買い、自宅近くのシネマコンプレックスで映画を観て講義ノートを作るという日々。そんなことで、これから紹介する本は講義一回分（一週間分のベストセラー）ということになります。まず、村上春樹『騎士団長殺し』（一、二部・新潮社）。この本と『職業としての小説家』（スイッチ）を材料に村上と川上未映子が縦横に語り合った『みみずくは黄昏に飛び立つ』（新潮社）。後者は帯に「ただのインタビューではあらない」と「騎士団長」の口吻が用いられているごとく、多くの知的仕掛けに満ち、読者の精読者（リズール）ぶりが逆に試される挑戦的で恐ろしい本です。

次はピアノ曲好きにはたまらない、恩田陸『蜜蜂と遠雷』（幻冬舎）。直木賞と本屋大賞を同時に受賞した作品で、分厚さを忘れるリーダブルな本。

そして、どの作も結末が尻つぼみという憾みは残るものの私が大好きな桐野夏生の最新作、『夜の谷を行く』（文藝春秋）と『デンジャラス』（中央公論新社）。前者は連合赤軍の一員だった女性を主人公に全共闘世代のその後を扱ったもの。後者は谷崎潤一郎の三度目の妻・松子の妹を主人公とした本で、江戸っ子の谷崎が『細雪』で船場ことばをなぜ駆使出来たのかが分かります。

面白い本に出合う確率は一割。心に残る本が五冊欲しければ、五〇冊読めば良いのです。金額にして一〇万円。これを高いと見るか、安いと見るかは各々の価値観によりますね。（写真には、他に辻村深月『かがみの孤城』（ポプラ社）を掲載）

★好きな場所を教えてください。

まずは浅草。弘前（青森県）。それから、水のきれいな郡上八幡（岐阜県）、醒ケ井（滋賀県）、柿田川湧水群（静岡県清水町）。でも何よりも好きなのは新緑の季節の青山キャンパスです。黄葉の銀杏並木も素敵ですね。副学長になって一つだけ良かった点は、誰もいない早朝にそうした風景を独り占めする至福を知ったことでした。少しだけ早起きして、静謐に満ちた都心の緑に身を置いてみませんか。

★最後に学生に向けてメッセージをお願いします。

「孤立を恐れるな」。必要以上に空気を読んだり、無理に人に合わせる必要はありません。「一人でいる時間」を大切に、自分の信ずる道を進んで大成して下さい

―ご退職される篠原進先生について―

博士後期課程　岡島由佳

篠原進先生が二〇一八年三月末日をもってご定年を迎えられる。青山学院大学に着任されて、三十二年。長きに亘って学生の教導に先生はお力を注がれてこられた。

先生のご専門は日本近世文学。なかでも井原西鶴や八文字屋本の浮世草子を研究されている。これら近世小説の文学史的位置付けを明らかにする一方で、歌舞伎や浄瑠璃といった他の文芸の特性、出版ジャーナリズムの動向などにも幅広く目を配り、大局的な観点から日本近世文学を捉えていらっしゃる。これまでに多くの業績を示し続けてこられた。

研究・教育にご尽力された先生の人となりをあらわす思い出を述べたい。先生は折に触れて多くの助言をしてくださる。そのなかでもとりわけ記憶に残っている言葉がある。それは、「ノートをとるように」。板書を写し、少しメモを加える程度に思っていた私は、発言の本当の意味がよく分かっていなかった。お言葉の真意のほどが理解できたのは、その後のことであった。

ある時、演習で西鶴の作品を取り扱ったときのことである。発表準備で悩んでいた私は、かつて先生がまとめられた『西鶴諸国はなし』の手書きのノートを拝見する機会にめぐまれた。一つの話に対して、緻密な分析・調査が詳細に記され、疑問点の気づきが新たな発見となり、結論に到達するまでの思考の過程が書き込まれたそれを見たときの衝撃は今でも忘れられない。先生の美しい字で書かれたノートからは研究に対する姿勢と人柄がにじみ出ていた。多角的に捉える視点と合わせて、問題を深く究明することの重要さを知り、なんとか演習発表日を迎えたが、先生の鋭い質問にしどろもどろになったことを覚えている。

厳粛な中にも和やかな雰囲気のある授業後、先生の研究室は多くの学生で賑う。演習の相談も兼ねて先生の研究室で昼食をとるときは、先生のお弁当をその場にいた学生がいただくこともしばしばあった。

そこでは、授業全般に関すること、授業中ではなかなか質問できない個人的なこと、将来のこと等について相談に乗っていただき、私たち学生にとっては貴重な時間となった。どんなにお忙しい時であっても、耳を傾けて聞いてくださる先生に、悩みを打ち明け、時には答えが出たことに安堵の涙を流す学生を目にしたこともある。社会に出る前の、人生の岐路に立つ私たちをいつも暖かくご指導してくださった。学窓を離れたあとも、篤実な性格でいらっしゃる先生を信頼し、敬慕して研究室を訪ねる先輩方の姿をたびたびお見かけした。

このような高潔な研究者として、また人格高い教育者としてあられる先生が、副学長になられてからは、一層御多忙を極める日々を過ごされていたことと推察する。十四号館五階の演習教室から十階の研究室まで颯爽と階段を上られる先生がご定年を迎えるとは今でも信じ難い。いつまでも若々しくていらっしゃる先生にまだまだご指導いただきたいことは山ほどある。先生が本学をお離れになることは、大変寂しいことであるが、先生の深遠な教えを人生の指針として心に刻み、先生の御学恩に少しでも報いることができるよう、研鑽を積んでゆきたい。

今後とも変わらぬご指導を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

一つの区切りとしてご定年をお祝い申し上げ、深く謝意を表しますとともに、先生のますますのご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

二〇一七年度講義題目

〈大学院〉

上代文学演習（一）
『日本書紀』の再検討　矢嶋　泉

上代文学研究（二）
［前期］
『万葉集』紡がれてきた「よみ」の歴史　城崎　陽子
［後期］
書物研究序説　小松　靖彦

中古文学研究（一）
『源氏物語』藤裏葉巻を読む　土方　洋一

中古文学演習（二）
『源氏物語』と和歌　高田　祐彦

中世文学研究（一）
『六代御前物語』の輪読　佐伯　眞一

中世文学演習（二）
『道堅自歌合』の研究および、注釈の作成　山本　啓介

近世文学演習（一）
黄表紙『鼠婚礼塵劫記』を読む　大屋多詠子

近世文学研究（二）
文学研究の諸問題について　篠原　進

近代文学演習（一）
論文作成に向けての準備　片山　宏行

近代文学演習（二）
近現代学会発表論文の完成　日置　俊次

近代文学演習（三）
泉鏡花作品の読解・考察　吉田　昌志

近代文学研究（三）
昭和期の作品から探る、近現代文学の文化・思想　佐藤　泉

韻文学研究
『長短抄』研究　廣木　一人

劇文学研究
「劇文学」の世界を多角的に知る　根岸　理子

日本語学研究（一）
美しい文章の統語的性質について　近藤　泰弘

日本語学演習（二）
語用論研究　澤田　淳

日本語教育学演習
日本語教育における文字と語彙の指導について　山下　喜代

中国古典学研究A
司馬遷の『史記』を読む　遠藤　星希

〈学部〉

文学研究法
文学・日本語学研究に必要な知識と方法の習得　矢嶋　泉
文学研究の基礎力・原本読解能力の養成　山本　啓介
文学研究の基礎を身につける　土方　洋一
文学研究の基本的な手続き、方法、文献の扱い方　高田　祐彦

日本文学史
上代・中古文学史　矢嶋　泉
中世文学史　佐伯　眞一
江戸時代の文学史　大屋多詠子
明治・大正の文学史　片山　宏行

古典文学概論
江戸文学を通して「古典」の理解を深める　大屋多詠子

近代文学概論
短編小説の世界　日置　俊次

漢文学概論
先秦・漢・魏・晋・南北朝時代の「文学」作品について　遠藤　星希

日本語日本文学情報処理法
コンピュータを研究で有効活用するためにデータの整理と処理について学ぶ　岡田　一祐

日本語学概論
日本語の仕組みを学習する　近藤　泰弘

日本語史
日本語の歴史を考察する　澤田　淳

表象文化研究概論
表象研究の方法の習得と領域横断的な知の再編を目指す　村上　克尚

日本学入門
「日本学」を通じて、日本の言語・文学・文化を考察する　土田久美子

文学交流入門
日本文学を「文学交流」の視点から展望する　小松　靖彦

日本文化文学入門
留学生のための日本文化文学入門　佐伯　眞一

日本文学演習
『萬葉集』の美とその翻訳
［前期］　PRIMIANI, Oleg
［後期］　小松　靖彦
『古事記』の世界　矢嶋　泉
『古今和歌集』を読む　高田　祐彦
『源氏物語』横笛巻精読　土方　洋一

『とりかへばや物語』を読む　吉野　瑞恵
『新古今和歌集』研究　山本　啓介
『平家物語』を読む　佐伯　眞一
『今昔物語集』を読む　目黒　将史
ベストセラーを作ろう　篠原　進
黄表紙『桃太郎発端話説』を読む　大屋多詠子
元禄時代の歌舞伎役者、特に若衆方、若女方の研究　染谷　智幸
卒論に向けて　片山　宏行
現代短歌の研究と実作　日置　俊次
大正から昭和初期、戦後の評論　佐藤　泉
大正期の短篇小説を取り上げ、「文学」を研究的に読む　掛野　剛史
近現代文学研究方法の習得と敗戦直後の短編小説の精読　村上　克尚
劇文学の世界を多角的に知る　根岸　理子

翻訳演習
日本文学や日本文化の英訳と日本語言文との比較検証および再翻訳　緑川眞知子

中国古典文学演習
『唐詩選』を読む　遠藤　星希

中国文学・思想演習
『老子』を読む　和久　希

文学交流演習
異質な〈他者〉としての異国の表象　西野入篤男

日本語学演習
語用論観点から日本語表現についての分析　澤田　淳
大正時代から現在に至る、発音・アクセントの変化について　中川　秀太
日本語の特徴を明らかにする　奥田　芳和
日本語学研究の方法論全般について　近藤　泰弘

日本語・日本語教育演習
日常使用している言語について、地理的・社会的観点から考えるための基礎的な力を養う　鑓水　兼貴

日本文学講読
『源氏物語』須磨巻を読む　高田　祐彦
『徒然草』講読　山本　啓介
近代文学作品の読解　植田　理子
『記』『紀』『萬葉』を読み解く　松田　浩
草双紙を読み、変体仮名の基礎知識を習得する　二又　淳

中国古典文学講読
中国古典作品の講読　加納留美子

日本語学講読
敬語に関して幅広く学ぶ　奥田　芳和

書道の歴史と実技
中国書道史と実技　大橋　修一
日本の風土に根差した書の美を、名品を臨書しながら学ぶ　柿木原くみ

日本語教育概論
日本語教育の現状や内容、指導方法について理解を深める　山下　喜代

日本語教授法
外国人に教える「日本語教育」について、基本的な知識・手法を学ぶ　荒巻　朋子

特別演習
『萬葉集』・書物学・文学交流に関する卒業論文作成指導　小松　靖彦
卒業論文作成指導　矢嶋　泉
平安時代の文学、またはそれに関する対象を扱う卒業論文作成指導　土方　洋一
平安文学の物語・和歌を対象とした卒業論文作成指導　高田　祐彦
主に中世文学を対象とした卒業論文作成指導　佐伯　眞一
短詩形文学とそれに関連する作品を対象とした卒業論文作成指導　山本　啓介
主に近世文学を対象とした卒業論文作成指導　篠原　進
近世後期の文学を対象とした卒業論文作成指導　大屋多詠子
近現代文学を対象とした卒業論文作成指導　片山　宏行
近現代文学を対象とした卒業論文作成指導　日置　俊次
現代の文化、文学、思想に関する卒業論文作成指導　佐藤　泉
日本語学関連をテーマとした卒業論文作成指導　澤田　淳

日本語教育や日本語に関する卒業論文作成指導　山下　喜代

日本語教育演習A

「日本語会話クラス」の開設を想定としたグループワーク日本語教育研究法の学習と研究レポートの作成　山下　喜代

日本語教育演習B

日本語教育における学習内容の把握、および授業計画の立案　三原　裕子

日本文学特講

最新のテキストで読む『古事記』　矢嶋　泉

古典文学における表現の仕組み　高田　祐彦

『源氏物語』の〈語り〉の構造　土方　洋一

短詩形文学（韻文学）の軸であった和歌・連歌・俳諧　山本　啓介

「武国」日本の精神史　佐伯　眞一

近世文学を多角的に掘り起こし、理解する　染谷　智幸

『南総里見八犬伝』と八犬士　大屋多詠子

菊池寛「話の屑籠」を読む　片山　宏行

文学作品を通して、近現代社会の規律、管理の在り方を理解する　佐藤　泉

横光利一研究―短編小説の世界―　日置　俊次

文学交流特講

［前期］

多言語・多文化化の進む現代の日本語をめぐる「文学交流」　河路　由佳

［後期］

〈人間の安全保障〉と文学　小松　靖彦

日本文学とアジア

アジアにおける伝承の広がり―ギリシアから日本まで―　KHALMIRZAEVA, Saida

日本文学とアメリカ・ヨーロッパ

西欧における日本文学の受容　畑中　千晶

表象文化論

説話・芸術論・物語文学で読む書・香・画の世界　松岡　智之

演劇作品と日本文学との関係を考察する　今井　克佳

日本文学特講A（集中講義）

シナリオ表現を学ぶ　柏田　道夫

中国文学・思想特講

唐代の詩人白居易を学ぶ　髙芝　麻子

中国古典文学特講

清代の文言小説を、漢文訓読によって読む　福田　素子

日本語学特講

電子化コーパスを利用して文法記述を行うための方法論を学ぶ　近藤　泰弘

外国語との比較対照をとりいれながら、日本語の文法と意味の特徴について考える　澤田　淳

言語の変異について考える　鑓水　兼貴

日本語教育特講

日本語「文法」の指導内容と教材化について

日本語「文法と語彙」の指導内容と教材化について　山下　喜代

日本語教育実習

「短期集中日本語会話クラス」の開講準備、授業実施、事後評価活動　山下　喜代

日本文学研究のための英語

日本文学を専攻する学生が、英語で書かれた日本文学・文化論を正確に理解し、自ら英語で発信する能力を養成する　SEN, Raj Lakhi

音声表現法

状況に応じた音声表現の習得・社会での実践方法について　夷石寿賀子

文章表現法

文章技術をみがく　加藤　祥

〈研究室だより〉

＊二〇一八年三月の卒業生は一一二名、四月入学生は一二〇名でした。大学院前期課程三月修了生は三名、四月入学者は四名でした。

＊二〇一七年度から新たに非常勤講師として、荒巻朋子、夷石寿賀子、植田理子、遠藤星希、岡田一祐、柿木原くみ、柏田道夫、加藤祥、加納留美子、河路由佳、ハルミルザエヴァ・サイダ、ラージ・ラキ・セン、高芝麻子、土田久美子、根岸理子、中川秀太、福田素子、オレグ・プリミアーニ、松田浩、三原裕子、吉田昌志の諸先生方にご尽力いただいています。

＊二〇一七年度は、佐藤泉教授が学科主任を務められました。

＊二〇一七年度は小松靖彦教授が在外留学（大英図書館）のため前期休講なさいました。

＊二〇一七年度日本文学大会（春季）・講演会・総会が五月二十七日に青山キャンパス、十四号館大会議室で開催されました。講演会については本会報4頁をご覧下さい。

＊二〇一七年度日本文学大会（秋季）・講演会が十一月十八日に青山キャンパス十七号館一七三一〇教室で開催されました。講演会については本会報6頁をご覧下さい。

〈編集後記〉

はじめに、この度会報の作成にあたり記事の執筆をしてくださいました皆様ならびに取材を承諾してくださった先生方、その他作成に携わった皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。

去年、五十周年を迎えた日本文学科は記念すべき節目から再び新たな一歩を踏み出すことになり、その第一歩目の会報担当として活動し、拙稿ではございますが私自身の記事を寄せることもでき、日本文学科の歴史に手形を残せたことを大変嬉しく思っております。

今回の会報は前年とは異なる構成を築きつつ、今年一杯でご退職なされる篠原進先生に関連する記事を比較的多く掲載しました。私も取材に伺った側にも関わらず様々なことをご教示いただき充実した会報作成をすることができました。また、秋季大会ではNHKアナウンサーでラジオ番組「すっぴん！」のアンカーを務め、日本文学科の卒業生であられる藤井彩子氏にご講演をいただきました。「言葉」や「声」に焦点を定めた講演は、日本文学科に所属する私たちにとって大変有益かつ貴重なものであったと実感しております。それに引き続き、前年と同様にゼミ紹介も開催しました。前年の反省を生かし広い教室で行うことにより一年生が円滑に各ゼミを巡ることができ、予想を裏切らない盛況ぶりを見せました。

去年とはまた異なる趣向の会報が完成し、新たな歴史の一歩としてふさわしいものになったかと思います。度重なる行事の運営に再び課題の輪郭が浮き彫りになる場面もありましたが、それをさらなる発展の伸びしろとして活発な躍進を遂げられるよう努めてまいりたいと思います。

川上　大地

訃報・曽倉岑名誉教授

二〇一八年一月十五日、曽倉岑先生が逝去されました。享年八十三。先生は一九七四年四月に本学日本文学科に着任、二〇〇三年三月の定年退職までの三十年近く、研究と教育に尽力されました。専門は『万葉集』を中心とする上代日本文学。著書に『萬葉集全注 巻第十三』（有斐閣）など。御冥福をお祈り申し上げます。

編集委員

教員

土方　洋一　　小松　靖彦

学年二年生

川上　大地

学年一年生

鈴木　那奈　　青野　莉奈

唐澤　麻衣

会報　第五十二号

二〇一八年三月一六日　発行

〒150-8366　渋谷区渋谷四―四―二五

青山学院大学総研ビル10F

日本文学科研究室内

編集　青山学院大学日本文学会

電話　（〇三）三四〇九―七九一七

FAX（〇三）三四〇九―八〇〇五